

コードスイッチングのアコモデーション理論による 一考察

A Study on Code Switching by the Theory of Accommodation

宮原 温子
Atsuko MIYAHARA

Abstract

As one of the social psychological concepts, the theory of accommodation describes the adjustment of speakers' speech style, characterized by 'convergence' where a speaker convergers his/her speech style to the recipient, and 'divergence' where a speaker diverges his speech style from the recipient. Bilingual speakers of Japanese and English have three speech styles, consisting of one speech style in Japanese, second style in English, and another with code switching, and through the adjustment of switching between different speech styles, bilingual speakers gain social approval, achieve self-presentation and share solidarity. This dissertation studies this aspect using the theory of accommodation.

Keywords : code switching, The theory of accommodation, convergence, divergence

キーワード：コードスイッチング、アコモデーション理論、コンバージェンス、
ダイバージェンス

1 はじめに

日本語英語バイリンガルは、日本語での会話スタイル、英語での会話スタイル、コードスイッチング（以下、CS）をする会話スタイルという三つの会話スタイルを持っている。CSとは、バイリンガルがインフォーマルな会話の中で使用言語を切り替えることであり（岡1995）、ごく自然に現れる現象である。CSは語、句、文のいずれの単位でも起こるが（岡1995）、一文の中で、骨組み自体が切り替わることもある（宮原 2012）。

筆者はCSの持つ機能を分析した際、CSにはCSの使用合図の機能があると述べた（宮原 2009、2011）。CS使用合図の機能とは、CSそのものによってCS使用開始と使用継続を示し、相手にCS使用を承認させ勧誘するものである。バイリンガルはインフォーマルな会話においてCSをするが、CSに対して一様の態度を持っているわけではない。CSを多用するバイリンガ

ルとそうではないバイリンガルがいる。また、ある一人のバイリンガルのCSの出現頻度も一様ではなく、頻度の高低が見られる。

会話スタイルの社会的心理的モデルの一つとしてアコモデーション理論があるが、話し手は自身のスタイルを受け手のスタイルに近付けたり（コンバージェンス）、遠ざけたり（ダイバージェンス）して話し方を調整するというものである。アコモデーション理論については2で詳しく述べる。バイリンガルは一言語による会話スタイルからCSをする会話スタイルに切り替えたり、反対に、一言語による会話スタイルに切り替えるたりする。そこには、会話スタイルを切り替え、受け手と同じ会話スタイルにしようとする様子や、あるいは切り替えをしないことで話し手の会話スタイルを維持しようとする様子がうかがえる。小論では、バイリンガルの会話スタイルの切り替えによる調整の様相をアコモデーション理論を用いて考察したい。

分析材料は筆者が2007年12月から2008年1月にかけて採取した第一次資料を使用する。インフォーマントは都内の総合大学に通う19～21歳の大学生男女である。彼らはコミュニティーをなした友人同士であり、会話はインフォーマルなものである。

2 アコモデーション理論とスタイル切り替え

2-1 アコモデーション理論

アコモデーション理論とは、人々がコミュニケーションの受け手との関係や社会的承認、自己提示などを意識してコミュニケーションの方法を調整するというものである。アコモデーション理論はスピーチ・アコモデーション理論：Speech Accommodation Theory（以下、SAT）として（Giles et al. 1973, Giles 1973）始まっている。SATはGilesらによって、環境に対する個人の認識とコミュニケーションの方法を調整する社会的認知プロセスに焦点をおいて開発された。その理論的骨子は、心理的概念の価値と可能性、また、社会的背景における異なる話し方の力学を明らかにするために研究された（Giles et al. 1987）。Rossらは日本語母語話者日本人大学生が非日本語母語話者に対して、標準日本語、フォリナートーク、英語のいずれの方法で答えるかという調査研究を行い、それらがコンバージェンスあるいはダイバージェンスなのかを考察している（Ross et al. 1990）。

GilesらによってSATが提唱された後、多くの研究者によってSATの研究が進み、Gilesらに再考され、コミュニケーション・アコモデーション理論（Communication Accommodation Theory）（以下、CAT）に発展した（Giles et al. 1987, Giles et al. 1991）。再考されたSATの定理によると、コンバージェンスとダイバージェンスに先行するものとその調整方法、帰結は次のようになる。

コンバージェンスは、話し手が受け手の社会的承認、コミュニケーションの高効率、受け手との連帯感、アイデンティティの確証を求める時、受け手が持つ特有の会話スタイルや非言語のふるまいかたに近付けようとする調整である。それによって、コンバージェンスは話し手のレパートリーを広げ、社会的比較、社会的承認、高いコミュニケーション効率を上昇させる個

人的、関係的、社会的、文脈の要因に働く。この調整が適切であれば、受け手からの発話によって肯定的に価値付けられる。

一方、ダイバージェンスは、話し手自身のイメージを顕著にしたい時、また、受け手から個人的に分離したい時、あるいは、コミュニケーターの中で対立があり、その対立がコミュニケーションスタイルに関して突出したものである時、あるいは、受け手の話し方を変えたいと思う時、コミュニケーションのパターンを修正したり、受け手のふるまい方から遠いものにしようとする調整である。それによって、ダイバージェンスは話し手のレパトリーを広げ、個人的、関係的、社会的、文脈の要因が認められ、突出したものを上昇させる。

話し手がコンバージェンス／ダイバージェンスを試みた結果、次のような帰結をみる。コンバージェンスは、受け手が自身のコミュニケーションのスタイルに調和し、メンバーシップを感じる典型的なものを持っており、社会言語学的に最適の距離、割合、頻度、的確さを持っており、話し手の努力や選択が高く、善意があると感じられると、友情や吸引力、連帯感を高く評価される。ダイバージェンスは、話し手自身のコミュニケーションのスタイルに調和しておらず、メンバーシップを感じる典型的なものに適合しておらず、社会言語学的に距離がありすぎ、頻繁であり、話し手の努力や選択は高いが、悪意があると感じられると否定的に捉えられる。

2-2 スタイルの切り替え

阿部は、青森県弘前市の津軽方言話者による方言と共通語の切り替えを8年間にわたって調査し、津軽方言話者がどのように切り替えを行い、切り替えのスキルが自動化されていくことを例を示しながら説明している(阿部 2006)。阿部は、方言と共通語の切り替えを、フォーマル／インフォーマルと言った場面の違いと、方言／共通語といったコードの使用に相関が見られる場合は「スタイル切り替え」と呼んでいる。話し相手によって切り替えの現れ方が異なり、また、時間と共に共通語の発話が部分的に自動化されていくことから、第二言語習得研究とのリンクの可能性も示唆している。阿部はアコモデーション理論に触れてはいないが、話し手は受け手との関係、つまり自己提示をどのようにするかということが一つの要因になって、スタイル切り替えを行っていることを指摘している。阿部による方言と共通語の切り替えの調査研究は日本語英語バイリンガルの一会話の中で見られる会話スタイルの切り替えに示唆を与えるものである。

3 考察

3-1 インフォーマントのCSに対する態度

バイリンガルはCSをするが、自らのCSに対しての態度は、大きく二つに分かれる。CSをすることはごく自然であると捉えるものがある一方、拒否感を持つ者もいる。小論では、CSを自然な表れであると捉えているインフォーマントをAffirmative CS (以下、ACS) とよび、CSに

対して強い抵抗感を感じているインフォーマントをnon-Affirmative CS（以下、nACS）とよぶことにする。また、日本語のみによる会話スタイルをJスタイル、英語のみによる会話スタイルをEスタイル、コードスイッチングの見られる会話スタイルをCSスタイルとよぶことにする。

著者が採取したインフォーマントによるディスカッションからCSに対する考えを下に示す。

まず、nACSのCSに対する強い抵抗感は、「CSは言語能力の衰退、あるいは上達の妨害と感じられる」「CSに慣れ親しんでいる集団に反発を感じる」「一言語で完結する話し方が正統である」「日本人であれば日本語で正しく話さなければいけないという他者からの圧力がある」という声で表された。nACSにとって、EスタイルとJスタイルは「私たちのスタイル」であり、CSスタイルは「私たちのスタイル」ではないと言える。

次に、ACSのCSに対する態度は「(友だち同士のインフォーマルな会話では)CSをする話し方が普通である」「友だち同士のインフォーマルな会話をする時に、他者が使用言語を制限するのはおかしい」「トピックによって、また感情を表すために、より簡潔に言い表せるほうに切り替えて使うのは自然である」「一つの言語だけで話す環境、例えば授業などのフォーマルな場所があり、そこで正確に一つの言語を使うことができれば、インフォーマルな場面ではCSをしても言語能力の衰退にはならない」「インフォーマルな会話において、会話参加者のそれぞれの使用言語が異なっていたり、CSのある発話であってもかまわない」という声で表された。さらに、自らのCSスタイルの構造や特徴を提示し、それに対して同意や気付きを述べるなど、CSスタイルに興味を持ち、日頃から自身の話し方を認識している様子がうかがえる。ACSにとって、Jスタイル、Eスタイル、CSスタイルの全てが「私たちのスタイル」であると言える。但し、インフォーマントによって、CSスタイルへの積極的な切り替え、使用は違いがある。

3-2 インフォーマントにとってのコンバージェンスとダイバージェンス、その調整方法と帰結

2-1において、アコモデーション理論のコンバージェンスとダイバージェンスの調整方法と帰結を記した。ここでは、三つの会話スタイル間での切り替え、また会話参加態度の視点から小論のインフォーマントによるコンバージェンスとダイバージェンスの調整方法とその帰結を示す。

インフォーマントが自身の会話スタイルを受け手の会話スタイルに近づけたり、相手の会話スタイルに否定的な態度をとらず、受け手の意見や感情の表しに十分な反応を示したり、話の展開を促進したり、その場にふさわしい話題を提供して会話に積極的な態度で参加することをコンバージェンスとする。それは社会的承認の獲得と連帯感の増強に帰結すると考えられる。

一方、インフォーマントが自身の会話スタイルを受け手の会話スタイルから遠ざけたり、あるいは、受け手と自身の会話スタイルが異なり、かつ、好ましく思っていないと認識できる場合でも自身の会話スタイルを持続し、受け手の意見や感情の表しに十分な反応を示さなかった

り、話の展開に協力しなかったり、その場にふさわしい話題を提供せず、会話に消極的な態度で参加することをダイバージェンスとする。それは社会的承認の喪失と連帯感の減少に帰結すると考えられる。

3-3 nACS同士による会話

インフォーマントE（女19歳）とK（女19歳）による会話を用いて分析する。

インフォーマントEは、会話の相手によって使用言語を切り替えると言っている。インフォーマントEの実家は米国にあり、米国生まれで、大学入学まで米国に在住している。両親とも日本人だが、英語と日本語の両方が使用される家庭環境である。インフォーマントEは友だちとはほとんど英語で話すと言っている。インフォーマントKも実家は米国にあり、米国生まれで、大学入学まで米国に在住している。インフォーマントKの両親は日本人で、家庭では日本語で話すというルールがあるという。インフォーマントKは、日本に来るまでは日本語話者には日本語で、英語話者では英語で話し、CSはしなかったと言っている⁽¹⁾。インフォーマントEもKもEスタイル、あるいは、Jスタイルで話すと言っている。但し、大学入学以来、CSスタイルになることもあるとKは自己申告している。

インフォーマントEとKによる会話は24分33秒であり、296ターンある。ほとんどで英語で話されるが、CSに対して否定的な二人であるにもかかわらず、CSは現れている。

まず、ターン4でインフォーマントEは文末に日本語「微妙」をCSしている。この「微妙」は若者言葉として用いているようである。直後のターンでインフォーマントKはCSはしないが、インフォーマントEの冗談に英語で応酬しており、CSスタイルを受け入れていることがわかる。

【例1】

13 K : Oh really? oh yeah, ダンス? wait, yeah, you haven't missed ダンス?

14 E : Yeah, I haven't gone to dance for a while.

15 K : Oh yeah yeah, ね。'cause last week you were going to, but they're like, 緊急ミーティング.

16 E : I know. I'm going tomorrow, and I'm going Saturday.

17 K : Sa, oh yeaaaah, oh my good, (笑い) I'm gonna go crazy. Like

18 E : Oh my god.

19 K : You're right. 勉強会ね。

その後、英語での会話が続くが、ターン13からターン19まで【例1】、部活動の話めぐってインフォーマントKは名詞と終助詞「ね」をCSさせながら発話している。確認の用法を持つ終助詞「ね」を用いたり、ターン13から19までの間、笑い声も見られる。注目すべきは、ター

ン13でインフォーマントKが日本語で「ダンス」と発話したが、インフォーマントEはターン14で「dance」と言っていることである。

【例2】

65 K：〔教授名の一部〕 ちゃんの？

66 E：I don't think I wanna take.

67 K：But I thought 〔教授名の一部〕 ちゃんのしかなくない？

68 E：Oh really? 'cause I

69 K：Is there another business teacher? (E：Yeah I think so.)

70 K：Really?

71 E：Yeah I think so. That's why I don't really like how 〔教授名の一部〕 teaches (K：mmm) あと、ま Asian studies でもいいかなと思って、business.

ターン65でインフォーマントKは教授の名前を日本語によるあだ名でCSしている【例2】。それに対してインフォーマントEは、Kと同様のCSはしなかったが、ターン71で日本語によるフレームを用いた発話を行っている。

その後、会話はCSスタイルとEスタイルを交互に繰り返しながら続く。ターン170はインフォーマントEによる97語の英語の長い語りになっており、一語だけ日本語にCSしている。

インフォーマントKとEはおおむねEスタイルで話している。その中で、CSスタイルに切り替えがあった場合、直後に相手もCSスタイルに切り替えたり、CSスタイルの切り替えはしなくても冗談で応酬して積極的に会話に参加するコンバージェンスが現れる場合もある。また、自身の会話スタイルを変えないというダイバージェンスが現れることもある。しかし、そのダイバージェンスは長く続かず、CSスタイルに切り替わる。その後、Eスタイルに収束していく。インフォーマントKとEはCSスタイルに切り替えるというコンバージェンスとダイバージェンスを繰り返しながら、最終的にはEスタイルに戻っており、会話スタイルの調整を行いながら会話を作っていることがわかる。

インフォーマントKはJスタイルで話すことにもEスタイルで話すことにも以前から自信がある一方、インフォーマントEは日本語の語彙の不十分さや敬語の正確な使い分けに自信がないようでJスタイルへの焦燥感がある。筆者がインフォーマントEと話す限り、コミュニケーションに支障はなく目上への配慮のある話し方だが、祖母からの圧力と過剰な劣等感がJスタイルへの焦燥感を認識させているように感じられる。

インフォーマントEとKの会話スタイル切り替えを見ると、一時的なCSスタイルに切り替えによるダイバージェンスとコンバージェンスを行うことがあり、CSスタイルへの切り替えによる調整によってお互いの距離をとったり、自己提示をしたり、アイデンティティの確認を求めていると考えられる。インフォーマントEとKは、CSスタイルに抵抗感を持ちながらも、

ゆれのあることがコンバージェンス／ダイバージェンスの様相からわかる。

3-4 ACS 同士による会話

インフォーマントH（男19歳）、L（男21歳）、M（女19歳）による会話による会話をういて分析する。

インフォーマントHは、バイリンガルがインフォーマルな会話の中でCSをすることは自然なことだと捉えているが、基本的には自身はJスタイルで話していると認識している。そのインフォーマントHの会話スタイルとその認識に対して、インフォーマントLもMも同意し、個々の会話スタイルがあると認めている。インフォーマントLはバイリンガルがインフォーマルな会話の中でCSをすることは普通の話し方だと捉えており、自らCSスタイルを「チャンポン・混ぜ言葉」と呼ぶのだと他のインフォーマントに教えている。また、CSスタイルは「気持ちいい」ので意識的に行うこともあり、CSスタイルを格好いいと評価している。インフォーマントMもバイリンガルがインフォーマルな会話の中でCSをすることは自然なことだと捉えており、自らが相手によってEスタイル、Jスタイル、CSスタイルを行き来しながら話すことを認めている。彼らはバイリンガルが三つの会話スタイルを持っており、伝達効率の高い会話スタイルに変えていくことが自然であると言っている。

インフォーマントH、L、Mによる会話は30分30秒で、460ターンある。Jスタイルで始まり、ターン33からインフォーマントLとMはCSスタイルに切り替わる。その後、インフォーマントLとMは三つの会話スタイルを行き来している。但し、インフォーマントHは殆どJスタイルのままで、インフォーマントHの発話にはCSは6つしか現れない。しかし、インフォーマントHはインフォーマントLとMがCSスタイルやEスタイルに切り替わっても、会話から離脱することなく、インフォーマントHに直接質問されたものでないものにもターンテイキングをして積極的に自分の意見を述べている。一方、インフォーマントLとMは、インフォーマントHのJスタイルに拘泥する様子もなく、会話は途切れることなく、頻繁にターンを取り合いながらリズムカルに進んでいく。【例3】にはインフォーマントHが珍しくCSをしたところが含まれている。

【例3】

68 L : Commission、なんていうんだ、そのセール、sellしたほど、

69 M : Oh, what you actually sold.

70 L : そう。

71 M : That's cool.

72 L : (家電量販店の名称) は時給いくらなの? 時給制?

73 H : うん。

74 L : いくらなの?

- 75 H : 1850円。
 76 M : That's so good.
 77 L : 超いいじゃん。
 78 M : Yeah. ジャリッチだね。
 79 H : リッチ、リッチ。
 80 L : 日本のほうが絶対いいと思う、そういうの、ちゃんとやって***
 81 H : そのう、Commissionっていうのはないけど、どんだけ売っても、変わらないけど
 (M : ふううん) まだ元が高いから (M : うん)

* : 聞き取り不能部分

ターン81でインフォーマントHが「Commission」を用いてCSしている。ターン68から70までのやりとりから「Commission」を用いるのがコミュニケーションの効率を高めると無意識に判断したと思われる。ターン68まではインフォーマントLとMはCSスタイルであり、ターン82からJスタイルになる。

インフォーマントL、H、Mにとって、三つのどの会話スタイルも社会的承認を得られるものなので、トピックや語彙、また、表現したい感情によってコミュニケーション効率の高いものに切り替えているようである。この切り替えはコンバージェンスであり、自己提示ができ、お互いに適切な距離を保ち、友情や連帯感を高く評価するものになっている。

【例4】

- 268 M : どこ行きたいの。
 269 L : オーストラリア。
 270 M : の？
 271 L : Bond Univeristyっていうところ。
 272 M : Bon?
 273 L : Bond B, O, N, D (M : aah) Bond University. Bondy***
 274 M : Wait, where is it at?
 275 L : シドニー。
 276 M : シドニー。(笑い)

【例4】はコンバージェンスに失敗した切り替えを含んでいる。インフォーマントLはターン271で留学先の大学名を示すために、単語単位のCSを行ったが、インフォーマントMは即座に聞き取れず、繰り返しを要求した。これに対し、インフォーマントLは大学名を再度言い、綴りも発することでインフォーマントMは情報を正しく受け取ることができた。ここで、インフォーマントLはCSスタイルへの切り替えがコミュニケーションの挫折を生じさせたことを即

座に捉え、ターン273ではEスタイルに切り替えている。このEスタイルへの切り替えはコミュニケーションを促進させ、コンバージェンスは成功している。ターン275と276では「シドニー」をJスタイルに切り替え、「シドニー」の母音を日本語らしくはっきり発音している。「シドニー」は、インフォーマントH、L、Mにとって英語で発音しても理解に全く差し支えないのだが、故意に日本語にCSして楽しんでいるのである。ターン276で、インフォーマントH、L、Mが笑っており、会話スタイルの切り替えによる伝達の円滑さの違いや、彼らが会話スタイルの不適切な切り替えによって伝達にまれに失敗することや、即座に修復できることを確認し、お互いに社会的承認を与え連帯感を増強させていることがわかる。

3-5 nACSとACSによる会話

インフォーマントC（女21歳）とEによる会話による会話を用いて分析する。

インフォーマントCは、バイリンガルがインフォーマルな会話の中でCSをすることは自然なことだと捉えている。インフォーマントEについては3-1で述べた。

インフォーマントCとEによる会話は29分30秒で、284ターンある。会話はEスタイルで始まったが、インフォーマントCはターン3でCSをし、インフォーマントCはCSスタイルでインフォーマントEはEスタイルとCSスタイルを行き来しながら会話を続けていく。【例5】はインフォーマントCとEによる会話の始まりの部分で、【例6】はターン209から215の部分である。【例5】と【例6】を比較すると、【例6】ではインフォーマントEがCSスタイルで発話している様子がわかる。

【例5】

1. C : So who's cooking tonight?
2. E : I have no idea.
3. C : え、てか、who's home?
4. E : Well, the thing is my mom and grandma, they have a performance coming up. (C : Oh, ok.) And it's like, it's not, I don't think it's not, as big as the one that my mom had. 'cause it was just one performance at night. But and my grandma's choreography will be in it too だから,,, so it should be interesting. (C : ああ) So they're busy, like in the studio, like,,, you know dancing and stuff. (C : hmm) so,,, I guess I'm gonna make it. (笑い) (C : あら) そう since my brother is not, I, I was thinking maybe we can go eat Indian curry or something.
5. C : Yeah, but your bro's going to that
6. E : Like,,, so yeah. Like he's good at cooking, actually.
7. C : Oh really.
8. E : But he never cooks for people. He only cooks for himself.

9. C : あ、そうなんだ。What does he cook?

... : 言い淀みの部分

【例6】

209 C : へーすごいね。Cambodia. 行ってみたいな。(E : ねえ。) てかbackpacking してみたいな。

210 E : Backpacking is so much fun.

211 C : いろんなとこ行ってみたい。

212 E : ほんとに。Like that's what we did when we went to India じゃん? (C : うん。) ほんとに、ほんとに楽しかった。It's like, you just bring the necessary, the most upmost necessary items, in your backpack. It's like 軽いし、軽く感じるし、なんかいらなくなったら捨ててもいいっていう感じの服持っていくから。It's so much fun. It's like freedom って感じ? like,,, (C : ふううん) 'cause like, ほんとに。For like 下見and stuff, 数人で行ったじゃん? 前、インドのときに。それで、like for the hotels, we didn't even make reservations, we just went, we had backpacks. 移動的にも何時間かかるかわかんなかったし、だからそのままバックパッカー用のホテルとか行ったり。

213 C : いい経験になるし、絶対。(E : ほんとに。) ほんとにやってみたい、それ。うん、うちのお父さんだめって言うんだよね。(E : mmmm) Too dangerous, だめ、みたいな。

214 E : Aaa, yeah.

215 C : ま、わかるけどさ。

ターン209から215では、インフォーマントCもEもCSスタイルであり、ここではCSスタイルが連帯感を感じられる典型的なスタイルと捉えられているようである。ターン212では、CSに抵抗感があるインフォーマントEが頻繁なCSをして語っている。受け手であるインフォーマントCにインフォーマントEの経験談を伝えているのだが、受け手のインフォーマントCの会話スタイルであるCSスタイルに切り替え、共感や社会的承認を求めていると思われる。

会話全体をみると、おおむねインフォーマントCはCSスタイルで、インフォーマントEはCSスタイルとEスタイルを行き来していることがわかる。インフォーマントCはインフォーマントEのEスタイルにほとんど切り替えようとしなない。インフォーマントCにとって、Eスタイルも「私たちのスタイル」の一つであるから、Eスタイルに対して否定的な態度をとらないことでコンバージェンスをしたと捉えることもできる。しかし、インフォーマントCがインフォーマントEのEスタイルに対して何らかの自己提示を示し、やや距離感をとったとも考えられる。全てのインフォーマントが、言語能力は動的であり日本語と英語の両言語が同程度に

十分であるとは認めていない。インフォーマントCは、インフォーマントEが高い英語言語能力を持つと感じており、両者間のコミュニケーションにおいては、Eスタイルは伝達効率が低いと考え、Eスタイルへの切り替えを控えたとも考えられるだろう。

3-3で考察したnACSであるインフォーマントKとの会話とACSであるインフォーマントCとの会話を比較すると、インフォーマントEのCSスタイルへの切り替えの態度は明らかに異なっている。インフォーマントCとの会話では、インフォーマントEの語りの部分において受け手であるインフォーマントCの会話スタイルに切り替えている。インフォーマントCはバイリンガルの持つ三つの会話スタイルは全てが「私たちのスタイル」であるため、インフォーマントEのCSスタイルへの切り替えに対して社会的承認を与え、連帯感を感じていると思われる。それは、インフォーマントCがインフォーマントEの比較的長い語りにあいづちを打ち共感の言葉を述べ、インフォーマントEも同様にインフォーマントCの発話にあいづちを打つという態度に表れている。また、インフォーマントCがインフォーマントEの話の内容に興味を示し、よき聞き手である態度からうかがい知ることができる。

4 おわりに

ACSもnACSも会話参加に積極的な態度であったが、社会的承認の獲得と喪失、かつ連帯感の増減の帰結に関与する会話スタイル切り替えに基準の相違がみられた。

nACSは、ACSである受け手の会話スタイルが「私たちのスタイル」ではないCSスタイルに対して、受け手の会話スタイルに近づけるというコンバージェンスを行う。さらに、nACSである受け手が「私たちのスタイル」ではないCSスタイルに切り替え、ダイバージェンスを行った時でさえ、CSスタイルに切り替え、社会的承認を与え、連帯感を増強させる。nACSは形式の相違を基準として、受け手の会話スタイルに近づけることがコンバージェンスとなっている。同時に、形式の相違を基準として、受け手の会話スタイルから遠ざけることがダイバージェンスとなっている。nACSはCSスタイルに対して抵抗感があるが、資料を見る限り、受け手のCSスタイルにコンバージェンスしており、nACSの一つの会話スタイルとして顕在する。バイリンガルのインフォーマルなコミュニケーションにおいては、CSへの拒否的態度の維持よりもコミュニケーターとの適切な距離を保ち、自己提示をし、社会的承認を獲得し連帯感を増強させる調整のほうが優先されるものと考えられるだろう。

ACSは受け手の会話スタイルが自身の会話スタイルと異なっている場合、それに近づけることもあるが、自身の会話スタイルを維持したまま受け手の会話スタイルに批判的な態度を示さないというコンバージェンスを行う。時に、コンバージェンスに失敗することがあり、このことからACSにとって、適切なコンバージェンスは伝達効率の高い会話スタイルを選択することであることがわかる。よって、ACSにとって、形式を近づけることは、社会的承認の獲得・喪失、連帯感の増減には関与しないといえ、社会的承認の獲得・喪失、連帯感の増減に関与するものは、その会話スタイルが持つ伝達効率であると考えられる。

ACSとnACSの会話では、nACSがACSの会話スタイルに近づけるといふコンバージェンスが見られたが、ACSがnACSの会話スタイルに近づけるといふコンバージェンスはほとんど見られなかった。ここからも、ACSがコミュニケーター間での伝達効率を考慮してEスタイルへの切り替えを控えたと考えられ、ACSにとってのコンバージェンスとダイバージェンスは伝達効率の高低が関与していることがうかがえる。

CSに対して肯定的な態度であるACSは伝達効率を、CSに対して否定的なnACSは形式の異同を基準にして会話スタイル切り替えを行うことがわかる。これらを図1と2で示す。

図1 ACS にとっての会話スタイル切り替え
基準と帰結

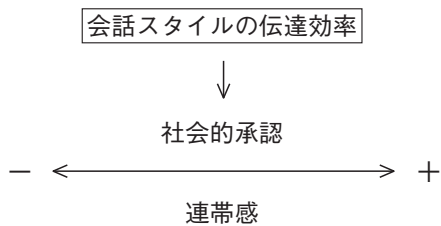
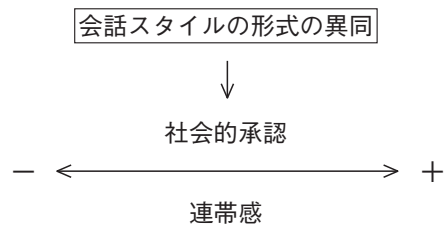


図2 nACS にとっての会話スタイル切り替え
基準と帰結



ACSもnACSも会話スタイルを切り替えながら、受け手との適切な距離を保ち、自己提示をし、社会的承認を獲得、あるいは喪失し、連帯感を増減させることがわかった。バイリンガルコミュニケーターは言語使用に対する態度や言語学習に対する態度、環境、また自身の言語能力の影響を受けながら、その場面でのコミュニケーター間の伝達効率を考慮し、三つの会話スタイルを切り替え会話を作り上げている。CSに対する態度は会話スタイル切り替えの基準に影響を与えるが、CSスタイルはバイリンガルが必然的に持つスタイルであり、環境に対する個人の認識とコミュニケーションの方法を調整する一つの会話スタイルとして顕在するといえるだろう。

【註】

(1) K自身は、I used not to talk Japanglish. と言っている。

【参考文献】

- 阿部貴人「個人のことばを捉える視点—スタイルの切り替え—」『日本のフィールド言語学』桂書房、2006年。
- 岡秀夫「コード・スイッチングをめぐる諸問題」『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』溪水社、1995年。
- 宮原温子『平成20年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻修士論文 日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチングの一考察—機能を中心に—』2009年。

- 宮原温子「日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチング—機能的分析を中心に—」『目白大学人文学研究』第8号、2011年。
- Giles, Howard. Accent Mobility: A Model and some date, *Anthropological Linguistic* Volume15 Number2. 1973.
- Giles, Howard. Taylor, Donald, M. and Bourhis, Richare. Towards a theory of interpersonal language: some Canadian date, in *Language in Society*, 2. 1973.
- Giles, Howard. Mulac, Anthony. Bradac, James J. and Johnson, Patricia. *Speech Accommodation Theory: The First Decade and Beyond*, *Communication Yearbook* 10. 1987.
- Giles, Howard. Justine, Coupland. Nikolas, Coupland. *Accommodation theory: Communication, context, and consequence*, *Contexts of Accommodation*, Cambridge University Press, 1991.
- Ross, Steven. Shortreed, Ian M.. *Japanese Foreigner Talk: Convergence or Divergence?*, *Journal of Asian Pacific Communication* Volume1. 1990.

(平成24年11月9日受理)